

東南アジアにおける生薬の比較研究

(第Ⅶ報)†

—— 動物を基原とする中薬について (2) ——

新田 あや*・吉田 集而*・小島 一郎**

A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part VII

—— On Chinese Crude Drugs Originated in Animals (2) ——

by

Aya NITTA, Shuji YOSHIDA and Ichiro KOJIMA

前報にひきつづき節足動物以外の動物体の全部あるいは一部を基原とする中薬について報告する。記載方法などはすべて前報と同様である。本報では54種類、4市場で136品目を含む。大型動物の骨、角、皮膚などは、それだけでは科さえも鑑別できないので、ひとまず生薬名の示す通りの基原をあげ、類縁あるいは従来使われた類似および質偽生薬の基原も追加しておいた。

紫稍花* (淡水産海綿)

市場品：S 246 蕨霄花

基原：Spongilla sp. または Ephydatia (Spongillidae マミズカイメン科)

考察：本生薬は淡黄かっ色の糸屑状であるため、種の同定はできない。

異名：紫霄花，淡水海綿，河棉，紫肖花

珊瑚* (さんご類)

市場品：S 618 海底栢，K L 605 珊瑚

基原：Corallum spp. ? (Coralliidal サンゴ科)

考察：2市場品は異種である。S 618は橙赤色ないし赤色の有節枝状で、径1～3mm、時に1cm、1～2cmごとに節があり、分岐は節部でなされ、節部は環状に膨脹、節間はこまかい縦紋がある。断面は多孔質で軽く、細いものは脆く折れやすい。K L 605は全体に橙赤色で、径1

* 京都大学薬学部生薬学教室

**住友化学工業株式会社農薬事業部宝塚研究所

†「動物を基原とする中薬について(1)」『東南アジア研究』(1974) Vol. 12, No. 2 pp. 254-268.

～3mm, 節はないが, よく分岐している。表面は平滑で, 光沢があるものと, こまかい縦紋のあるものがあるが, いずれも質は極めて硬くて重く, 折れ難い。

異名: 紅珊, 火樹, 珊瑚屑, 燬珊瑚, 本珊瑚, 桃色珊瑚, 古渡珊瑚, 鉢罷婆福羅, 珊瑚枝

禾虫干 (ごかい類の虫体)

市場品: K L 654 禾虫干

基原: *Tylorrhynchus heterochaetus* Quatrefages イトメ (Nereidae ゴカイ科)

考察: 2形態がある。すなわち最後節まで鰓のあるものと, 前半部のみに鰓があり, 後半部は縦割半円柱型のものである。前者は遊泳する時の型で“バチ”と呼ばれ, 後者が全虫である。遊泳のあと, 泥中に残された後半部を“ホリバチ”という。本草綱目に“禾虫”として記載されているが, 基原は未同定である。

蚯蚓* (みみず類の内臓を除去した虫体)

市場品: S485, Dj320 地龍干, K365 川地龍, K L 606 地龍

基原: *Lumbricus* sp. (Lumbricidal ルンブリクス科)

Pheretima sp. (=Perichaeta) (Megascolecida フトミミズ科)

考察: K L 606 の中に *Pheretima* 属のものが数個体混入している。4市場品ともほとんど完全な個体がないことおよび両属に属する種が多いので, 種の同定は不可能である。

薬材学ではこれら両属のほかに *Perichaeta* 属 (Lumbricidae) もあげているので, 種を問わず利用されていると思われる。HK190 地龍 (ホンコン市場品 中国産) は4市場品のどれにも一致しない大型のものである。

異名: 土龍, 典蟪, 土蟪, 大地龍, 蚯蚓干, 蚓虜, 土地龍, 曲蟪, 土龍, 蛭蟪, 寒蟪, 寒蟪, 寒蚓, 寒欣, 蟪蟪, 附蚓, 堅蚕, 堅蠶, 却行, 鳴砌, 鳴切, 歌女, 白頭, 地龍子, 地龍干, 廣地龍, 乾地龍, 千人踏, 白頸蚯蚓, 白蚯蚓, 蟪蟪, 胸臆

水蛭* (ひる類の虫体)

市場品: S 486 水蛭干, K366, K L 607 水蛭

基原: *Hirudo* sp. または *Whitmania* sp. (Hirudidae ヒルド科) または *Haemadipsa* sp. (Haemadipsidae ヤマビル科)

考察: 完全個体欠損のため, 同定は極めて困難である。

薬材学では *H. nipponica* Whitman 一種だけをあげているが, 近縁属の数種が利用されていると思われる。

異名: 馬蝗, 馬蛭, 馬蟪, 馬蟪, 吸血虫, 馬鼈, 肉鑽子, 塔干, 水麻貼, 馬蟻, 肉砧子, 馬曠, 大日馬蟪

牡蠣* (かきの殻)

市場品: A 熱加工してないもの——S 494 生牡利, K L 622 生牡蛎——

B 熱加工してあるもの——K375 燻牡蠣——

基原：Ostreidae イボタガキ科

考察：磨滅および碎片となっているため同定は不可能であるが、おそらくは肉を食用とした残りの貝殻を利用していると考えられるので、可能性のあるものをあげておく。

- 1) *Crassostrea gigas* Thunb. マガキ（薬材学では *Ostrea gigas* Thunb. と記載されている）、美味で食用として養殖も行なわれ（低塩分でも可）、大形（約30cm）、北海道以南。
- 2) *C. belcheri* Sowerby コケゴロモ、大形種（20cm）、西南太平洋に普通、養殖もされる。
- 3) *Ostrea denselamellosa* Lischke イボタガキ、肉は美味で、量も多い。本州以南。
- 4) *Saxostrea subrigona commercialis* Iredale et Roughley. オーストラリアガキ、食用、殻は大形、オーストラリアに分布。

異名：牡蠣壳、蠔壳、左壳、蠔、古贄、左顧、河牡、牡力、牡蛤、牝蠣、茂利、蚶仔、蠣蛤、蠔山、蠔甫、牡蠣殼、河牡利、海牡蠣、河羅殼、螃蠣蚶、牡蛤、牡蠣蛤

石決明*（あわび類の殻）

市場品：A 貝殻——S 495 生石決、K L623 石決明——

B 貝殻の粉末——K376, Dj 324 石決明——

基原：S 495 は 6 個体あり、それらは 3 属 4 種からなる。K L623 は 5 個体あり、3 属 3 種で、両市場に共通するものは 1 種だけである。

A *Sulculus versicolor* Reeve フクトコブシ、7 孔、殻頂高く、孔はもり上がっていない。和歌山県以南。——S 495— a（1 コ）、K L623— a（3 コ）

B *S. supertexta* Lishke トコブシ（薩摩産でナガラメという型†）、9 孔、殻高は高く、殻は厚い、殻表の模様が特徴的。九州以南、——S 495— b（2 コ）

C *Natohaliotis discus* Reeve クロアワビ、4 孔、凹凸紋著しく、殻高は低い。北海道南西部から九州、朝鮮、中国北部——S 495— c（1 コ）

D *N. siebaldi* Reeve メカイアワビ、4 孔、外唇線がはり出し、まるみがある。北海道南西部から九州、朝鮮南部——K L623— b（1 コ）

E *Sanbaliotis varia* L. イボアナゴ、4 孔、殻表は比較的高く、その上の螺肋上に疣状結節が不規則に出現。本州南部からインド洋——S 495— d（1 コ）

F *S. planata* soweby ヒラアナゴ、5 孔、殻は低平、いぼ列は弱い。屋久島以南——K L 623— c（1 コ）

G *Sanbaliotis* sp., 4 孔, S 495— e（1 コ） 以上すべて *Haliotiidae* ミミガイ科

† 原色日本貝類図鑑 p. 6 (1959)

表1 石決明の基原と市場品 ()内は個体数

	Origin		Hole No.	S-495	KL-623
A	<i>Sulculus versicolor</i>	Reeve フクトコブシ	7	a (1)	a (3)
B	<i>S. supertexta</i>	Lischke トコブシ(ナガラメ)	9	b (2)	
C	<i>Notohaliotis discus</i>	Reeve クロアワビ	4	c (1)	
D	<i>N. sieboldi</i>	Reeve メカイアワビ	4		b (1)
E	<i>Sanhaliotis varia</i>	L. イボアナゴ	4	d (1)	
F	<i>S. panata</i>	Sowerby ヒラアナゴ	5		c (1)
G	<i>S. sp.</i>		4	e (1)	

考察：薬材学では *Haliotis gigantea* Gmelin マダカアワビ（メカイアワビは本種の特に殻高の低いもの）および、*H. ovina* Gmelin (= *Ovinatis ovina* L.) マアナゴの2種だけを記載しているが、このデータからみれば属、種を問わず利用されると思われる。すなわちこれも肉を食用にした残りの殻を薬用としているので、市場および個体数が増加すれば、基原はもっと多くなるであろう。あわび類の分類についてはなお不明な点があり、学名も文献によりまちまちであるが、ここでは原色日本貝類図鑑（1959年、改訂版）、続原色本貝類図鑑（1961）、原色世界貝類図鑑 Vol. I（1965）および Vol. II（1966）を使用した。なおホンコン市場品 HK196 石決（1971年6月入手）は4個体あったが、いずれも B（トコブシ—ナガラメ型—）であった。

異名：真海決,¹⁾ 关海決,²⁾ 九孔石決明, 鮑魚壳,²⁾ 光底海決,¹⁾ 耳片壳,¹⁾ 毛底海決,²⁾ 鮑魚片,²⁾ 海決, 鮑貝, 九孔螺, 千里光, 石決明, 石厥明, 朱子房, 生石灰, 洋海決, 海決明, 海津殻, 海蚌殻, 海蚌殼, 關海決, 石決明殻, 洋海決明, 煨石決明, 關海決明, 懐奇令史, 九孔決明, 生杵石決明, 真海決石決

文蛤*（はまぐり類の殻）

市場品：A 熱加工してないもの——K L 624 蛤壳(1)

B 熱加工してあるもの——K L 625 蛤壳(2)

C 粉末となっているもの——K 377 海蛤粉, K 378 白蛤粉

基原：K 624 は次の3種類からなる。

A *Meretrix lusoria* Röding ハマガリ, 殻皮はうすく, 卵三角形, 殻頂部はふくらんでいる——K L 624— a (1 コ)

B *M. lyrata* Sowerby ミスハマグリ, 殻表の彫刻が前半部だけにある。——K L 624— b (2 コ)

C *M. meretrix* L. タイワンハマグリ, ふくらみは強く, まるみがあり, 殻表は黄白色で茶

1) 中薬志で *Haliotis diversicoloris* に対し。

2) 中薬志で *H. disci* に対し。

かっ色の天絢状の模様がある。——K L624—C（3コ） 以上 Veneridae シロコガイ科）

考察：薬材学では *Meretrix meretrix lusora* Gwelin (= *M. lusora*) タイワンハマグリだけがあげられているが、本生薬も牡蠣や石決明と同様に肉を食用とした残りの殻が利用されていると考えられる。

異名：花蛤，海蛤，黄蛤，蛤壳，海蛤壳，白利壳，青蛤壳，河蛤壳，海貝，蛤貝，斛蛤

真珠母*（あこやがい類の殻）

市場品：S 616 珍珠母

基原：Pteria (*Pinctada*) *martensii* Dunker* アコヤガイ → *Pinctada fucata* Gould ベニコ
チョコガイ (Pteriidae ウグイスガイ科)，本州中部以南，太平洋，インド洋

考察：オーストラリア産 *Pinctada fucata* Gould と本邦産のアコヤガイ，ベニコチョコガイとは全く同種であるというのでベニコチョコガイの学名を使ったほうがよいという記載がある。

（続原色日本貝類図鑑，1961年）

異名：珍珠母，明珠母，生珠，真珠貝

海蝶蛸*（いか類の甲羅）

市場品：S 496, K 379, Dj 325 海蝶蛸，K L325 魚古

基原：*Sepia esculenta* Hoyle* コウイカ，*S. subaculeata* Sasaki* カミナリイカ，*S. hercules*
*Pilsbry** (= *S. lalimanus* コブシメ)，*S. andrena* Steenstrup*，*Sepiella maindroni* de Ro-
chebrune* のいずれかである。（Sepiolidae → Sepiidae コウイカ科）

考察：骨だけでは種の同定はできないが，このような骨をもつ種はあまり多くなく，ほぼ上記のものに限られてくる。

異名：墨魚骨，烏賊骨，烏鰂骨，墨魚蓋，烏魚骨，白竜，海蝶，海鮪，淡骨，柔骨，鯨骨，明
鯨，烏賊甲，烏鰂，墨魚，鯨魚，烏鰂魚，纜魚，烏賊魚，烏賊殻，海蝶消，海瓢硝，黒魚骨，
脯鯨骨，鴨烏骨，纜魚骨，仙頭海鮪，潮陽海鎖，海若白事小吏

海馬*（たつのおとしご類）

市場品：S 497, K 380, K L628 海馬，K L627 白海馬

基原：4品目中 K380 と K L628 は同種と思われ，結局3種となる。

A *Hippocampus kelloggi* Jordan & Snyder, 中国名は克氏海馬——S 497 海馬

B *H. cf. histrix* Kang. 中国名は刺海馬——K 380, K L628 海馬

C *H. trimaculatus* Leach. 中国名は三斑海馬——K L627 白海馬。（Syngnathidae タツノ
オトシゴ科）（写真1 A～C）

考察：中薬志や薬材学には同属別種が記載されているので，同属であれば種を問わず，利用さ
れていると思われる。

異名：龙落子魚，水馬，对海馬，大海馬，小海馬，直海馬

海竜* (たつのおとしご類) (写真1-D)

市場品：S 498, K 381, K L 629 海竜, K L 630 白海竜

基原：Solenognathus hardwickii Gray (Syngnathidae タツノオトシゴ科), 中国名は刁海竜 (中薬志より)

考察：4 市場品はそれぞれ大きさが異なっているが、すべて同種と考えられる。薬材学では S. schlegeli Kaup (細海竜) と S. acus L. の2種があげられているが、後者には尾びれがあり、やがら類に似ている。

異名；蛆海竜, 楊枝魚, 銭串子

彭魚鰓 (さめ類のえら)

市場品：S 524, K L 660 彭魚鰓

基原：Selachii サメ目

考察：さめ類は種類が多く、また多くの用途を持つ。すなわち肉、ひれは食用に、皮は鞣皮および研磨用に、あるいは細工物とされている。えらはいうならば廃物利用と考えられる。両市場のえらはいずれも類白色で、ホンコン市場品HK 203 鰓魚鰓 (澎湖

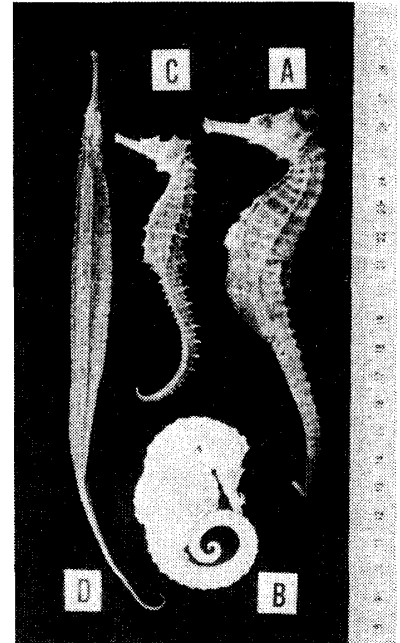


写真1 海馬と海龍

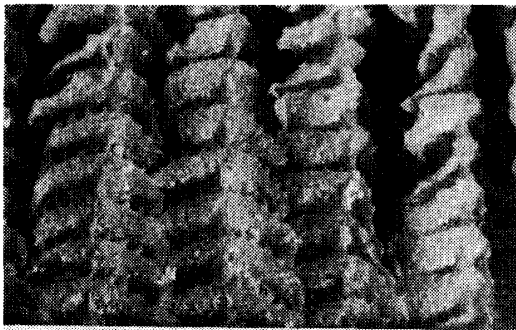


写真2-A S 524 彭魚鰓

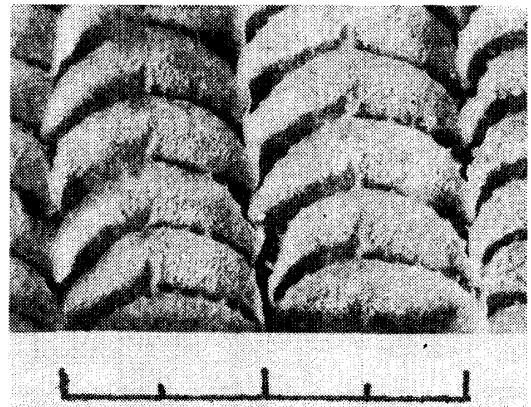


写真2-B K L 660 彭魚鰓

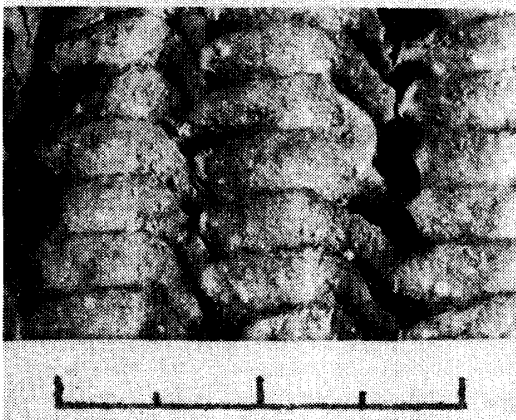


写真2-C HK 203 鰓魚鰓

産）は黒色である。S524 は2種類あり，うち1種 a は K L 660 と同じものと思われる。（写真2—A, B, C）

蝦蟆干（あかがえる類の内臓を除去した骨髄および皮肉）

市場品：S523 蝦蟆干，K383 田雞，K L 662 蝦蟆干，K L 663 怪奇里

基原：4品目のうち S523 と K382 は同種と思われるので，結局3種ある。

A *Rana longicrus* Stejneger ナガアジアカガエル (*Ranidae* アカガエル科)，台湾——K L 663 怪奇里

本種は細長く，体長55mm，外鼻孔は眼より吻端に近い。

B *Rana* sp.—1 —— S523, K382

C *Rana* sp.—2 —— K L 662

考察：Rana 属は約250種あり，同定は極めて困難である。

薬材学の蛤土膜は *Rana chensinesis* Davidson の輸卵管である。生薬としては輸卵管が正品で，あかがえる類から輸卵管およびその他の内臓を除いた皮肉および骨が廃物利用されたものが，ここにあげた市場品ではなかろうか。とすれば生薬はすべて雌かも知れない。いずれにしても *Rana* 属であれば種はいずれでもよいと思われる。

また輸卵管および卵巣からとった油を蛤蟆油という。

異名：蛤什蟆，田雞，赤蛙，赤蝦蟇，蝦土膜，蛤土蟆，蛤司嗎

（輸卵管および卵巣に対する異名を除く）

蛇蛻*（へび類の脱皮殻）

市場品：S499 白龍衣，K383 金龍衣，K L 631 龍衣

基原：*Elaphe* spp. (*Colubridae* ヘビ科)

考察：3市場品はすべて異種である。

S499 の体鱗は23列で，基原となる可能性のある種およびそれらの分布は次の通りである。

E. taeniurus Cope スジオヘビ，東南アジア，中国，台湾，朝鮮

E. carinata Guenther シュウダ，中国中南部，台湾

E. climacophore Boie アオダイショウ，日本

E. schrenckii anomala チョウセンナメラ，中国，朝鮮

K L 631 の体鱗は17列で，基原となる可能性のあるものは次の通りである。

E. rufodorsata Cantor コウライジムグリ，中国中，北部，朝鮮，シベリア

E. porphyracea Cantor ベニナメラ，タイ北部，ビルマ，アッサム，中国南部

K383 は既に形状を残さず，ばらばらになっているため不明。

HK197 毒蛇衣（ホンコン市場品，中国南部産）は体鱗が21列で，*Elaphe* sp. と思われる。

異名：蛇壳，龍退，龍子衣，龍子皮，龍衣，蛇皮，蛇退，長中皮，青龍皮，蛇退皮，局皮，蛇

衣, 蛇符, 蛇筋, 蛇腿, 蛇殻, 竜衣, 竜退, 石竜衣, 蛇退子, 竜子皮, 竜子衣, 弓皮。

蕪蛇* (どくへび類?の内臓を除去した皮肉および骨格)

市場品: S 525 製祈蛇, K 384 祈蛇, Dj 327 正祈蛇

基原: Colubridae ヘビ科

S 525 と K 384 は同種で Dj 327 は異種と思われる。

考察: 生薬はすべて頭部 (区別点) を欠くため, 種の同定は不可能であるが, 形態および分布から可能性のあるものをあげておく。

A S 525 および K 384 の基原と思われるもの

1) *Elaphe porphyracea* Cantor ベニナメラ, 中国南部, タイ北部, ビルマ, アッサム, ヒマラヤ東部, 体鱗はなめらかで, 17~19列。

2) *E. rufodorsata* Cantor コウライジムグリ, 中国中部, 北部, 体はなめらかで17~21列

B Dj 327 の基原は全く不明。

薬材学によれば, 蕪蛇の基原として *Agkistrodon acutus* Guenther ヒヤツポダ (Viperidae, クサリヘビ科—Crotarinae マムシ亜科) があげられている。このへびは体鱗が21~23列で, しかもうろこに竜骨を備えているはずであるが, 本生薬はこれに合致しない。

蕪蛇と次項で述べる白花蛇はしばしば混同されているが, 蕪蛇は古くから記載されており, 白花蛇はその類縁生薬と思われるので, 異名はなるべく蕪蛇の項目にまとめておく。ただし文献により, 特に白花蛇の異名として記載されているものはそのまま白花蛇の項目に掲げることとする。

異名: 百歩蛇, 白花蛇, 五歩蛇, 棋盤蛇

中薬志によれば蕪蛇 (大白花蛇) と金銭白花蛇 (小白花蛇, 金銭蕪蛇) は区別され, 白花蛇としてまとめられている。和漢薬名彙によれば *Agkistrodon* 属を基原とする生薬名には3系統あるが, それらは商品の形状によると思われる。

1) 白花蛇——白花, 白蛇, 花虫, 花蛇, 祈蛇, 骨蛇, 黥蛇, 黥蛇, 蕪蛇, 正祈蛇, 初白蛇, 紅骨蛇, 寒鼻蛇——渦状で大形。

2) 金銭蛇——黥蛇, 蕪蛇, 寒鼻蛇, 金銭白花蛇——渦状で小形。

3) 反鼻——蝮蛇, 五八霜, 地扁蛇, 反鼻蛇, 赤蝮蛇, 黒蝮蛇——渦状でなく棒状が多い。

白花蛇* (どくへび類の内臓を除去した皮肉および骨格)

市場品: Dj 326 正花蛇

基原: Colubridae ヘビ科

考察: 薬材学では *Bungarus multicinctus* Blyth. アマガサヘビ (Elapidae, コブラ科—Elapinae コブラ亜科) を基原とする。このへびは背面正中線上の鱗が六角形であることが特徴となっているが, 本生薬はこれに一致しない。また本生薬は体鱗がなめらかである。したが

って *Agkistrodon* 属にも合致しない。

以上蕪蛇，白花蛇とも基原は類縁のものであったが，頭部を除去した生薬は質偽生薬とみなしてよいのかも知れない。

異名：金銭白花蛇，小花蛇，金星地鱗，蕪蛇，褰鼻蛇，腹蛇，日本称反鼻蛇。

蛤蚧*（おおやもりの内臓を除去した骨骼および皮膚）

市場品：K L632 蛤蚧

基原：*Gecko gecko* L.* オオヤモリ（*Geckonidae* ヤモリ科），アジア南部に分布。

考察：ホンコン市場品 H K198 蛤蚧（北越産）は K L632 より小型であった。

異名：蛤蟹，仙蟾，蛤蚧干，合介，僂蟾，大蛤蚧，中蛤蚧，尾蛤蚧，南蛤蚧。

鱷魚肉（わに類の肉）

市場品：K L661 鱷魚肉

基原：*Crocodylidae* ワニ科

考察：アジアに分布するものは次の3種であり，生薬としてはそのうちのどれかであろう。

- 1) *Crocodylus porosus* Schneider カワグチワニ（インド，マレーシア，中国南部，フィリピン，オーストラリア北部，ニューギニア，フィジーおよびソロモン群島に分布）
- 2) *C. palustris* Less. ヌマワニ（インド，マレーシア，セイロンに分布）
- 3) *Alligator sinensis* Fauvel シナワニ（揚子江河流）

鼈甲*（すっぽん類の腹甲羅）

市場品：A 熱加工してないもの——S 501 生別甲

B 熱加工してあるもの——S 500, K L633 別甲, K 385 炒鱉甲

基原：*Amyda* (= *Trionyx*) *sinensis* Wiegmann* (*Trionychidae* スッポン科) インドシナ，中国，台湾，朝鮮，日本（日本産は亜種。T. s. *japonicus* スッポン）

考察：薬材学では用部は背甲と記載されているが，4市場品とも腹甲であった。

異名：甲魚壳，团魚壳，团魚盖，水魚壳，团魚甲，鼈盖，鼈壳，鼈盖子，脚魚壳，上甲，甲魚，王八盖子，土，鱉乳甲，別角，神守，鱉甲，鱉甲，鼈骨，團魚，土別甲，土鼈甲，炒鱉甲，鱉津甲，黒龍衣，神守上甲，河泊従事，團魚甲，脚魚

龜板*（かめ類の腹甲羅）

市場品：A 熱加工してないもの——S 503 生龜板

B 熱加工してあるもの——S 502, K L634 龜板, K 386 炒龜板, Dj 328 炒八甲

基原：*Geoclemys reevesii* Gray* クサガメ (*Testudinidae* カメ科) インド北部から中国全土，台湾，朝鮮，日本。

考察：薬材学では用部は背甲および腹甲で，上記基原に限らず近縁のものを利用するというが，市場品はすべて同種で，しかも腹甲であった。和漢薬名彙によれば背甲を龜甲，腹甲を龜

板という。

異名：龟甲，拖泥板，元武板，敗龟板，炙坎板，龟腹甲，烏龟甲，下甲，烏龟板，神屋，敗将，龟骨，龜版，水龟甲，漏天機，玄衣，督郵，龜甲。

鶏内金*（にわとりの砂囊の内壁）

市場品：A 熱加工してないもの——K L637 鶏内金

B 熱加工してあるもの——S 505 炒鶏内金，Dj 329 炒内金

基原：Gallus domesticus Brisson* ニワトリ (Phasianidae キジ科)

異名：鶏肫皮，鶏針皮，鶏中金，化石胆，化骨胆，鶏合子，鶏臍胚，鶏胃皮，鶏食皮，鶏肚子，鶏膝子，鶏灰皮，鶏内筋，鶏胆壳，鶏肫子，鶏黄皮，臍胚，鶏膽皮，鶏腰殼，内金。

刺猬皮*（はりねずみ類の皮膚）

市場品：S 506，S 507 獺猬皮

基原動物：Erinaceus amurensis amurensis Schrenck* ホクマンハリネズミ (Erinaceidae, ハリネズミ科) 中国北部に分布。

考察：本生薬は黄白色環を有する暗かっ色の棘と，その間に純白色の棘が点在する。全体に灰かっ色で，棘の先端は除去されている。本種に最も近縁の種はチョウセンハリネズミ *E. amurensis koreensis* Mori であるが，これは暗かっ色のかわりに褐白針を有するので，全体にはより白色が淡いと思われる。

薬材学には *E. europaeus dealbatus* Swinhoe も基原としてあげているが，これは純白針を持たない種と思われる。

異名：毛刺皮，猬鼠皮，刺魚皮，偷瓜畜，偷瓜罐皮，蝟皮，蝟鼠皮，刺血児，偷球子，刺鼠皮，猬，猬鼠，蝟，毛刺，刺皮，刺蝟，豚皮，彙皮，猬針，蝟巢，猬鼠，支那蝟，炙蝟皮，刺涓皮，虎鼠皮，蝟鼠皮，鼠膺皮，膺豚皮，黒膺針，山积鼠皮，蒙古刺猬，刺蝟皮。

穿山甲*（せんざんこう類の鱗甲）

市場品：A 熱加工してないもの——S 509 生山甲，K L639 山甲

B 熱加工してあるもの——S 508 穿山甲，K 388 沙山甲，Dj 330 川山甲，K L640 穿山甲。

基原：Manis pentadactyla Sundevall* コミミセンザンコウ (Manidae センザンコウ科) 台湾。

考察：動物図鑑では命名者はリンネである。動物体の位置により，鱗の大きさが異なる。K L 639 は大きく，S 509 は小さい。インド，セイロンには *M. crassicaudata* インドセンザンコウが分布するが，これも基原となる可能性がある。

異名：鯪鯉，兪鯪，石鯪鯉，山甲片，甲張，甲片，甲珠，山甲珠，炙甲片，甲片山甲，穿山甲片，透石烏，石鯪甲，陵鯪甲，鯪鯉甲，龍鯪甲，連鯪皴甲，（特に加熱加工したものを山甲珠，

沙山甲という）龍鯉

虎骨*（とらあるいは近縁動物の骨）

市場品：A 熱加工してないもの——K L644 虎骨

B 熱加工してあるもの——S53 虎骨，K392，Dj334 炒虎骨

基原：Felis tigris slyani Pocok*→Panthera tigris トラ（Felidae ネコ科）アジアに分布。

考察：薬材学によればトラに近縁の動物でもよいという記載がある。したがって Panthera pardus ヒョウ（アジア，アフリカに分布），Neofelis nebulosa ウンピョウ（東南アジア），Profelis temmincki ゴールデンキャット（東南アジア），Zibethailurus viverrinus スナドリネコ（東南アジア），Pardofelis marmorata マーブルキャット（インド，スマトラ，ボルネオ），Prionailurus bengalensis ヤマネコ（対馬，朝鮮からインド），Felis catus ネコ，Lynx lynx オオヤマネコ（北半球）などネコ科の骨が基原とされることもあるだろう。またネコ科のものだけでなく大型哺乳動物の骨が贗偽生薬となる可能性もあると考えられる。

異名：虎脛骨，虎身骨，大虫骨，狨骨，威骨，**𪔐骨**，**𪔑骨**，文蟲骨，李父骨，李耳骨，伯都骨，於兔骨，偃兔骨，露犬骨，𪔒猫骨，虎脛骨は上肢骨（上膊骨，桡骨，尺骨）および下肢骨（大腿骨，脛骨，腓骨）をいうが，肋骨（真肋骨，仮肋骨）と共に大きいものが上品である。

虎威骨は椎骨のような小さいものをいう。

虎牙（とら類の歯牙）

市場品：K L665 虎牙（写真3）

基原：虎骨に同じ。

考察：入手したものは第5歯より奥の歯であった。



写真3 虎爪(左)と虎牙(右)

虎爪（とら類の爪）

市場品：K L666 虎爪（写真3）

基原：虎骨に同じ。

考察：爪の形から前肢のものであろう。

虎鞭*（とら類の陰莖と睪丸）

市場品：K L667 虎鞭（写真4）

基原：虎骨に同じ。

考察：大型ネコ科のものである。

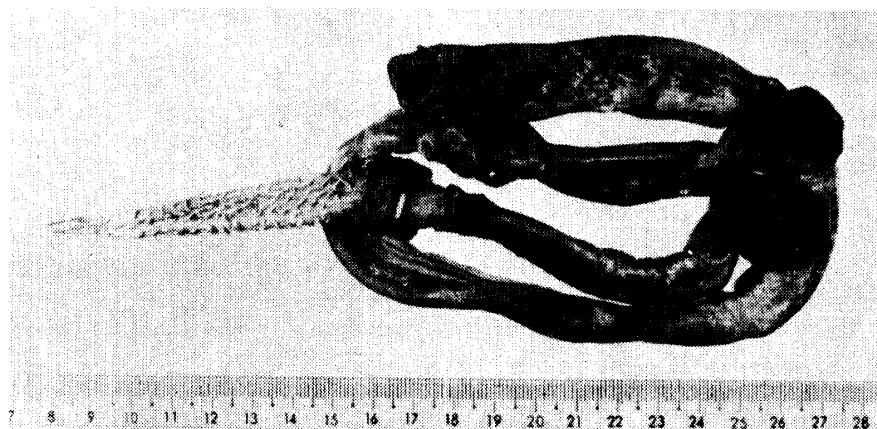


写真4 虎鞭

異名：虎腎，關虎腎

蛇顛角（いっかくの雄の門歯，厚い斜切片）

市場品：K L674 蛇顛角

基原：Monodon monoceros L. イッカク（Delphinidae イルカ科），北大西洋。

考察：本生薬は飲片であるため，同定は困難であるが，他の角類と異なり，ホーロー質ないし象牙質で，極めて硬く，半透明である。髓腔があり，らせん紋の一部が見られるので，一角と判断した†。

薬材学によれば“蛇顛角”はインド産で，基原不明の獣類の角であるという。

イッカクの雄の門歯は通常左側，稀に右側も発達して2歯になることがある。雌にはない。

異名：蛇角，一角，独角，巴阿多，ウニコウル。

鹿筋*（しか類の4肢の内一腱一，時に蹄，骨などもついたままのものがある）

市場品：A 蹄，骨のついたもの——K 394 鹿根（写真5）

B 肉，腱を長さ約2cmにカットしたもの——K L669 鹿根

C 肉，腱をカットしたものをさらに熱加工したもの——S527 鹿筋

基原：Cervus nippon nippon Temminck* → Cervus nippon Temminck シカ，日本，中国。C. elaphus L. アカシカ，アジア，ヨーロッパ

C. taiwanus Blyth カロク，台湾

C. unicolor, スイロク，サンバー，東南アジア（Cervidae シカ科）

考察：シカ類ならば種を問わないようである。

異名：鹿脚（前肢の掌骨以下，後肢の跗骨以下で皮膚，筋肉，蹄を完全に具えたもの）

鹿角霜*（しか類の角から鹿角膠をとったあとの角）

市場品：A 熱加工してないもの——K 393, K L645 鹿角霜, Dj 335 鹿角双

B 熱加工してあるもの——S 617 燉鹿角霜。

基原：鹿筋に同じ。

† 薬局 8, (11) 1200 ('57)

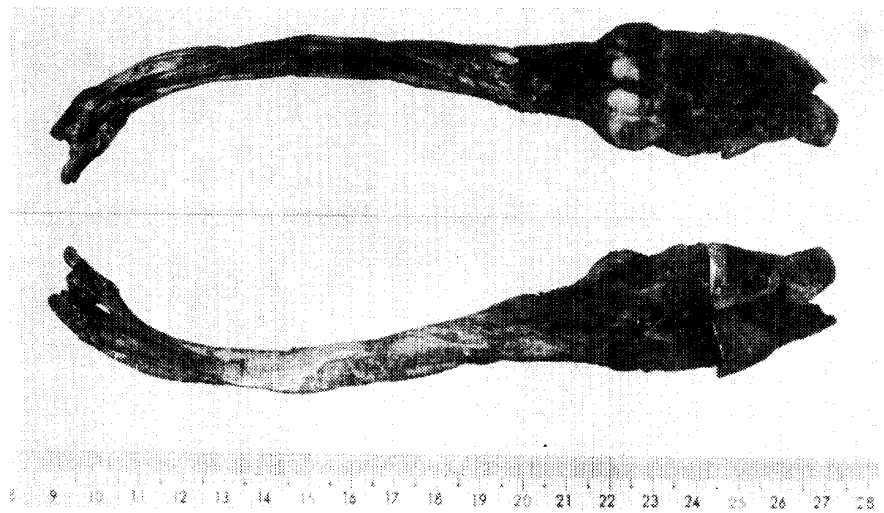


写真5 鹿根

考察：鹿角霜の表面は突起が縦に並んでいるから，角にまちがいないであろう。

異名：鹿角粉

鹿尾*（雌鹿の尾）

市場品：K L670 鹿尾朮

基原：鹿筋に同じ。

考察：雌鹿とは限らず，雄鹿の尾も利用されるのではなかろうか。

異名：古今薬物別名考によれば，鹿尾朮の別名として鹿外腎，鹿鞭があげられているが，これは尾でなく陰莖と睪丸である。

羚羊角*（れいよう類または水牛類の角）

市場品：S514 正羚羊，K395 羚羊角，Dj336 羚羊絲

基原：Bovidae ウシ科

考察：薬材学には5属6種が記載されているが，そのいずれであるか，あるいはまた全く別種のものであるかの判断はつきかねる。

正品は中央アジア，シベリアおよび蒙古産の *Gazella gutturose Pallas* キスナヒツジ，*mongolian Gazella* の角であるという†。本種の角は長さ36～40cm，基部は径9～12cmで，基部から先端に向かって約 $\frac{3}{4}$ まで，環状ないしらせん状の節があり，上端は節がなく，尖っている。

市場品は薄い削品であるが，S514は削品と角の先端部分があり，先端が少し曲って尖っている状態は文献に一致する。削品からだけ判断すれば3市場品は少しずつ異なっている。すなわちS514は白色で後述べるK L673白柱絲と，K395は類白色で，やや厚く，Dj336犀角絲と見わけがつかない。Dj336は白色でありガリボン様削品のほかに径約3cm，中央に穴のある薄い斜切片が混入している。高橋らは犀角などの鑑定に表面のルーペ視による模様†の相違を記載しているが，羚羊角についてはこの方面からの記載がない。

和漢薬名彙によれば，羚羊角の質偽生薬として水牛角，山羊角（かもしかの角），牛角，水牛蹄，牛蹄，馬蹄，象牙，鯨骨，水牛骨，牛骨，馬骨などをあげている。

以上のデータからS514正羚羊とDj336羚羊絲は *Gazella gutturosa Pallas* と推定されるが，K395羚羊角は水牛角ではないかと考えられる。水牛角の特徴は横断面において同心円状の模様を呈することであるが，K395はやや厚い縦削品であるため，これを確認することができない。次にいわゆる羚羊類で，それらの角が羚羊角と称される可能性のあるものをあげておく。これらは類縁生薬とされるべきものである。（ ）内は分布。

1) *Antilope cervicapra* ブラックバック，（インド）

† 薬局 9, (2) 174—5 ('58)

† 薬局 8, (11) 1198—1200 ('57)

- 2) *Gazella subgutturosa** コウジョウセンガゼル, (アジア中部から西部)
- 3) *Procapra picticaudata** チベットガゼル, (チベットからモンゴール)
- 4) *Pantholops hodgoni** チルー, (チベット)
- 5) *Saiga tatarica** (モンゴルからカフカス)
- 6) *Naemorhaedus goral goral** ゴーラル, (ヒマラヤ)
- 7) *N. caudatus* オナガゴーラル, チョウセンカモシカ, (東アジア)
- 8) *Capricornis sumatrensis* シーロー, (カシミールから中国, スマトラ)
- 9) *C. swinhoei* タイワンカモシカ, (台湾)
- 10) *Budarcas taxicolor* ターキン, (ブータン, ビルマ, 中国西北部)
- 11) *Tetracerus quadricornis* ヨツツノレイヨウ, (アジア)

なおシンガポールの薬店において薄削品を製するには、スライドグラスのようなガラス片を割って新しい切口でもって角をけずっていた。

異名：羚羊角尖，墜角，羴角，羴羊角，羴羊角，九尾羊角，尖羚羊角，片羚羊角，羴羊，羴羊，九尾羊。

羚羊骨 (大型動物の骨)

市場品：K L646 羚羊骨

基原：Bovidae ウシ科，前述の羚羊角を参照。

考察：比較的小さい骨のかなり厚い削品であるが，名称どうりのものかどうか判断不可能。

克柱絲 (うし科の角の削品)

市場品：K L672 克柱絲

基原：Bos sp. (Bovidae ウシ科)

考察：本生薬は淡紫かっ色のリボン状であり，K397 犀角絲とは区別できない。

和漢薬名彙の黒絲と推定される。黒絲の基原はウシ *Bos taurus* L. var *domesticus* Gmelin またはスイギュウ *Bos bubalis* L. の角である。

異名：黒絲

白柱絲 (うし科の角の削品)

市場品：K L673 白柱絲

基原：Bos sp. (Bovidae ウシ科)

考察：本生薬は白色のうすい縦削品である。質は均一で縦紋のみからなり，多孔質でないから骨でなく，角と思われる。

和漢薬名彙の白絲と推定される。白絲の基原は黒絲と同様にウシまたはスイギュウの角あるいは骨である。しかしこの場合は角である。

異名：白絲

犀角*（さい類またはうし科の角の削品）

市場品：K397, Dj338 犀角絲

基原：Rhinocerotidae サイ科，または Bovidae ウシ科

考察：K397は淡紫かっ色，Dj338は類白色のうすい縦削片で，いずれも縦細紋がある。

文献†によれば烏犀角は *Rhinoceras unicornis* L. インドサイ，および *R. sondaicus* Desmarest ジャワサイなど一角犀を基原し，薄片をルーペ視すれば中心に円孔のある半透明の多角円形体の集合からなり，その相接する周辺部は淡かっ色ないし淡黒かっ色を呈し，色調が濃い。また水犀角は *R. bicornis* L. → *Diceros bicornis* L. クロサイ，アフリカ産，および *R. (→Dicerorhinus) sumatrensis* Cuvier スマトラニカクサイなど二角犀を基原とし，その薄片は多角状円形体で，その周辺部が最も著しく濃色であり，間質部はかえって淡明である。しかも円形体の中心には厚膜の髄鞘に囲まれた髄腔が認められるという。一方類似生薬である水牛角は同心円状の濃淡の層からなり，犀角類の紋様は認められないという。本生薬は縦削品であるため紋様は認め難いけれども K397 犀角絲と K L672 克柱絲が，また Dj338 犀角絲と K395 羚羊角が，さらに S514 正羚羊と K L673 白柱絲が見わけがつかないほど似ているという点で，れいよう類と水牛または牛の角の構造がよく似ており，それは犀角とは違っているということ，および収集した市場品は真の犀角ではなくて，牛角または水牛角ではないかと考えられる。なおここではひとまず生薬名にしたがって項目別としたが，生薬の性状から整理すれば次のようになる。

表2 角類の各市場品の生薬名と性状の関係

市場	白 柱 絲	羚 羊 類	犀 角 絲	克 柱 絲
S	—	514 白色，リボン状の縦薄削品	—	—
K	—	395 類白色，やや厚い縦削品	397 淡紫かっ色，リボン状の縦薄削品	—
Dj	—	336 白色リボン状と径約3cmの薄い斜切片	338 類白色，やや厚い縦削品	—
KL	673 白色，リボン状の縦薄削品	—	—	672 淡紫かっ色，リボン状の縦薄削品

異名：犀牛角，香犀角，天馬角，柱角，兕角，广角，暹罗角，兕，兕，奴角，凹角，低密，牯犀，昆沙犛，毗沙，犀犛角尖，磨犀角，犀角片，犀角尿，夜明犀，骨咄犀，公犀角，母犀角，竭伽角，白犀角片，二黑犀角片，芦花犀角片，黒頭犀角片，烏犀角の異名は次の通り，烏犀，正西角，火犀角，本犀角，正犀角，黒犀角，正大犀角，正犀角片

犀牛皮*（さい類または水牛の皮膚）

† 薬局 8, (11) 1198—1200 ('57)

市場品：S 519, K L 648 犀牛皮, K 398 西牛皮, K L 671 正犀角皮

基原：Rhinocerotidae サイ科または Bovidae ウシ科)

考察：市場品中には2種類あると思われる。すなわち S 519 と K L 671 が同じ, K 398 と K L 648 が同じであるが, これは種のちがいか, または体の部分のちがいかは判断できない。犀牛皮は犀角より入手が容易であると思われるので, 本生薬は一角犀または二角犀の皮膚か, あるいは水牛皮かも知れない。

象牙 (ぞう類の長大な門歯の屑)

市場品：S 518 象牙片, K L 675 象牙絲

基原：Elephas maximus L. インドゾウまたは Loxodonta africanus Blumenbach アフリカゾウ

考察：インドゾウには4変種があるが, だいたいインドあるいはマレー地方産である。

異名：象牙屑

象皮* (ぞう類の皮膚)

市場品：S 516 象皮絲, K 399 象皮 (正象鼻)

基原：象牙に同じ。

異名：印度象皮, 生象皮, 伽郎

紫河車* (ひとの胎盤)

市場品：K L 651 紫河車

基原：Homo sapiens L. ヒト (Hominidae ヒト科)

考察：入手したものはクアラルンプールであるが, 調査したクチンおよびシンガポールの薬行にも売っていた。

異名：人胞, 包衣, 胎盤, 京河車, 温河車, 杜河車, 胎胞, 胞衣, 胎衣, 人胎, 河事, 胞星, 白河車, 草河車, 仙人衣, 混沌衣, 混元母, 佛架娑, 鮮胞衣

血余* (人髪 of 炭化物)

市場品：S 517 血余, K L 650 血余炭

基原：Homo sapiens h. ヒト (Hominidae)

考察：確認する方法はないが, 原料が豊富に得られるので, 文献通りの基原と思って間違いないだろう。

異名：髪灰, 血余炭, 乱髪炭, 尖髪炭, 人髪炭, 人退, 亂髪, 亂髪霜

お わ り に

前報と本報の2報にわたって, 東南アジアにおける4市場(シンガポール, クチン, クアラルンプールおよびジャカルタ)の動物性生薬について, 基原を比較検討し終えたが, 総括する

と、

(1) 葯材学や中葯志に全く記載されていない生薬があった。すなわち、白蚕衣、油虫珠、宋公祠、白鴿屎、鶏血纂膏、猪血、山羊血、黒兎血、禾虫干、羊天雷、蝦蟆干（あかがえる類の乾燥体）、彭魚腮、鱷魚肉、蛇顛角、などである。これらのうちで、本草綱目に全く記載のなかったものは、彭魚腮、鱷魚肉、油虫珠などで、そのほかは名称が違ってはいても何らかの記載があった。例えば蛇顛角は蛇角として、潮州産、禾虫干は禾蟲として中国南部沿海各地の水田の稲の根からとるとか、諸血として獸類の血があり、羊天雷という名称は使っていないが、ふんこがね類の虫体に関する記載がある。またさめ類は肉、皮およびひれの記載がみられる。

さて全く記載のなかったものはすべて中国南部で得られるものであるから、これらは中国南部の民間薬ではなかるうか。

また中国人は廢物利用の天才とも考えられる。牡蠣、文蛤、石決明、海螵蛸、彭魚腮、蝦蟆干、べっ甲、蚕砂や白殭蚕、凝固血液類、紫河車、血余、鶏内金や鶏蚕壳、鹿角、鹿筋、鹿尾羆、虎牙、虎爪など、それらの動物体を一度利用したあとの残りのものである。

(2) 実際の生薬が文献に記載されている基原と相違していることがあった。推車、羊天雷、へび類など。

なお羊天雷という生薬名は未だ文献では見えていないので、今回は最初ではなかるうか。

(3) 1ロットの中でも種が混合している場合があった。石決明、文蛤、桑螵蛸など。

以上の事実から動物性生薬は植物性生薬とは異なり、いわゆる分類学的に種を決定することにあまり意味がないように思われる。つまり植物における形態的特徴は種と結びつき、それによって使い分けられているものが多かったのに対し、動物ではある特別の標徴を持っていればすべて同一名で呼称され、同用途に使われてきたとみなされる。すなわち動物において同類性が属あるいは科レベルで（時に目レベルで）保たれているということである。そして経験的に是認されているけれども、成分に関する研究およびそれらの薬効のメカニズムが解明された時に始めて、そういったレベルでも支障がないという証明がされるであろう。

謝 辞

終りにのぞみ本研究資料の収集に際し、種々便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部名誉教授上尾庄次郎先生、シンガポール大学 Dr. H. Keng. マラヤ大学 W. R. Stanton 教授、クチン森林保護局、P. Chai 技官、日本薬学会、大阪市日盛株式会社鄭岳氏ならびに呉健行氏、また研究資料収集に御協力された京都工芸繊維大学在学中（1970. 4～1974. 3）のインドネシア留学生 Gunarso Budiman 君に深謝いたします。あわせて出国に際し、御便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部木島正夫ならびに宇野豊三両教授に感謝いたします。

参 考 文 献

- 南京薬学院薬材学教研組編『薬材学』(1961)
中国医学院薬物研究所等編『中薬志』Vol. IV (1960)
木村, 木島, 丹『和漢薬名彙』(昭21)
『実用中薬手冊』(1971)
劉亜農編『古今薬物別名考』(民国25年)
谷津・内田『動物分類名辞典』(昭47)『日本動物図鑑』(1949)
今泉『動物の分類』(1969)
吉良『原色日本貝類図鑑』(1959)
波部『続原色日本貝類図鑑』(1961)
波部, 伊藤『原色世界貝類図鑑』Vol. I (1965)
波部, 小菅『原色世界貝類図鑑』Vol. II (1966)
内海『原色日本海岸動物図鑑』(1956)
白井監修『国訳本草綱目』第10, 11, 12, 14冊(昭5~8)